

教学 IR データをいかに可視化するか —愛媛大学の事例を通じて—

加地 真弥

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

1. はじめに

大学ではガバナンスの強化に伴い、そのツールとしての Institutional Research（以下、IR とする）への関心が高まっている（高田ほか，2014）。中でも、教学 IR は学生の教育成果の測定から教育改善を進める点において注目されている（鳥居ほか，2013）。教育改善の方向性についての意思決定はなされたが、次のステップとしての具体的な教育改善の事例はあまり見られない（川那部・鳥居，2015）。教学 IR をどのように教育改善に結びつけるのかという実践は模索されているところである。

データの調査結果を公表するのも IR の重要な役割だが、代表的な媒体には「大学概要」や大学の公式 WEB ページ等がある（高田ほか，2014）。また、大学運営に必要な基礎情報をまとめた「ファクトブック」もある。学生数、入試、卒業、就職等、大学経営者が知っておくべき基礎データが網羅されており、意思決定のために提供される（寫田，2015）。IR 先進国である米国のほとんどの大学はファクトブックを保持しているが、国内でも広まりを見せつつあるが、大学内部の重要な情報を扱うこともあり学内限定での公開が多い。

またファクトブックのように、目的を組織の意思決定のみの活用にする、と、教職員との情報共有にはつながりにくい。本発表では、学内の構成員も教育改善につながる教学データを意識できる可視化の方法を愛媛大学の実践例を紹介する。

2. ポスターの内容

愛媛大学における教学 IR の機能は、同大学教育企画室が主に担っている。今年度から「データから考える愛大授業改善プロジェクト」という活

動を開始した。データを活用して教育およびカリキュラムの改善を支援することを目的に取り組んでいる。データを教育改善へとつなげるためには、学内の構成員にデータそのものへ関心を持ってもらうことが必要である。そこで、インパクトを持たせるためと、広く教職員に提供できるようにポスター「データで考える授業改善 Vol.01」を作成した（図 1）。

ポスターのコンセプトは主に 3 つある。まず、エビデンスに基づくことである。現状認識や意思決定、合意形成を感覚ではなくエビデンスに基づくために、具体的な数値をポスターに表示し、教育改善に資するメッセージも掲載した。

次に改善思考にさせる工夫である。ポスターには教育改善につながる大学の入学から卒業までのデータを掲載している。それらがストーリーになるようにデザインされており、イラストで直観的・視覚的に訴える工夫をしている。

最後に、わかりやすさを重視した。正確だが難解で網羅的なデータよりも、教職員が理解しやすい情報を提示した。

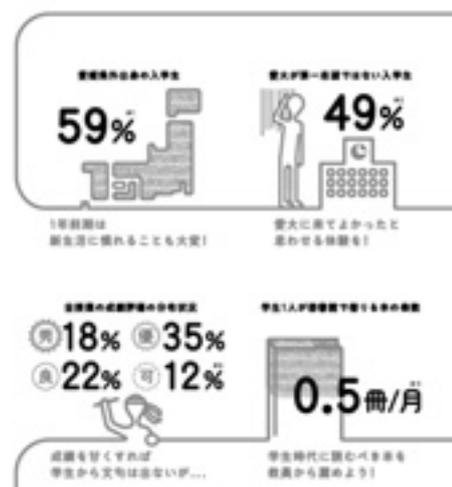


図 1. ポスターの一部抜粋

掲載項目は何度も検討を重ねて、厳選した 16 項目を掲載している。主に授業改善、カリキュラム改善に資するもので、学生のプロフィールが把握できることや学内の数値目標を掲載するなど、大学が組織的に重視している取組の成果もわかるようにした。また、大学の強みだけでなく課題も示すことで構成員への気づきを促している。このようなポスターを学内への配布や学内掲示することで教職員個々の気づきを促し、教育改善を支援することを目的とした。

3. ポスターへの反響

学内の各部署にポスター (A2 サイズ) を 1 部ずつ配布し、授業担当者にもポスター (A3 サイズ) を配布した。教育企画室の WEB ページにも掲載している。配布のみではなく、会議での報告をとおした組織的な情報共有も図った。また、学内での FD・SD 研修にも活用している。

ポスターには大学の課題も掲載したことで、批判がでるのではないかと懸念されたが、実際には批判よりも問題関心を引き出す結果となった。特に大学執行部からは、ポスターには掲載していない、他大学との比較や経年変化のデータなどを要求された。その後も、新入生の愛媛大学の進学理由の分析依頼など、データのさらなる要望を引き出す結果となった。

さらに IR の研修でもポスターを資料として配布した。教育企画室では、学内外の受講者を対象にした IR の研修を行っており、その中で SPOD フォーラムのプログラム「教育改善のための IR 活用」での参加者からの反響を紹介する。^{注)} 概ね肯定的で「数字を具体的に出すことで教員同士の会話が生まれそう」「批判も含めた議論がたくさん出ました、その意味でもこのポスターは意味がある」との意見があった。改善案では「海外へ留学する学生や受け入れる留学生のデータがあればいい」といった提案が出され、ポスターをきっかけに議論を活性化することを可能にしたことから、データを共有することの重要性が示された。

4. まとめ

単にデータを提供するのではなく、見せ方を工夫することでデータへの関心を引き出せる。たとえ蓄積された膨大なデータベースがなくても、学内にある既存のデータを使用すればよい。専門的な統計分析を必要とするデータ解析やファクトブックのように大学の基礎情報をまとめたものを作成し発行することも重要だが、ポスターでサンプルにデータを提示したことで、統計を苦手とする教職員にも理解を促進することができ、部局別のデータの提供やさらなる要望を引き出した。今後は、ポスターをきっかけとした議論から授業改善やカリキュラム改善へつながる情報提供を継続していきたい。

注) 本稿における参加者のコメントの掲載については、プログラムの参加者および講師の中井俊樹氏、清水栄子氏からは事前に了解をとっている。

参考文献

- 1) 畠田敏行：ファクトブック作成に向けた大学概要の活用について、大学評価と IR 第 1 号, 31-38, 2015.
- 2) 鳥居朋子・八重樫文・川那部隆司：立命館大学の教学マネジメントにおける IR の開発と可視化のプロセスに関する考察 - デザイン研究の知見を分析視角として -, 立命館高等教育研究第 13 号, 75-89, 2013.
- 3) 高田英一・高森智嗣・森雅生：IR におけるデータ提供と活用支援のあり方について - 九州大学版ファクトブック「Q-Fact」の取組の検証を基に -, 大学評価研究 13 号, 101-111, 2014.
- 4) 川那部隆司・鳥居朋子：学部の教育改善に教学 IR はどのように貢献できるか? - 立命館大学における IR プロジェクトと薬学部との協同による科目開発の事例から -, 大学教育学会第 37 回大会発表要旨集録, 268-269, 2015.